

基調講演 「博物館に求められるデジタル・スキル」

岐阜女子大学
後藤 忠彦 教授

文化活動・文化財などの資料のデジタル化は、1970 年代から各分野で始まりだし、その後、1980 年代になると映像・音声等のデジタル記録が進みだし、広く文化に関する各種情報のデータベース等の情報管理システムの利用がなされるようになってきた。

海外において、SCRAN のように、幾つかの博物館等の資料のデジタル化と共同利用も始まりだし、国内でも横断検索（例 各博物館の情報を横断的に検索）も検討されだした。また、これらの情報を用いた文化活動・創造活動等が始まりだし、新しく著作権・流通提供の方法も課題になってきている。

このような文化資料のデジタル化が進む中で、博物館も同様なデジタル化の流れであろうと考える。

博物館では、たとえば、

博物館資料のデジタル化とデータベース化
デジタル化情報の提示での活用
デジタル情報の流通と活用（新しい文化活動での利用）

など館内外で利用され、それを支援するデジタル・スキルについての能力が、学芸員等に今後必要とされだすであろう。

このようなデジタル化は、すでに多くの分野で始まっていて、博物館等の施設以外に、県・市町村でのデジタル・アーカイブの開発、デジタル・ミュージアムとして県全体の資料の収集管理と流通も始められている。また、デジタル化された情報を用いて、新しい文化創造活動が進められるようになってきた。

多くの県・市町村では、補助金による事業として、県内の博物館、生涯学習センター等の各施設が保管する資料のデジタル・アーカイブ化、市町村が補助金による地域の文化財、生活文化、自然などのデジタル・アーカイブ化が進められてきた。とくに、市町村の合併にあたって、旧市町村の生活文化を記録し残すために、デジタル・アーカイブ化を進めている。

このようなデジタル化された地域文化資料を保管し、そのデジタル・アーカイブ化を進めるために、基本的なデータベースの構成がなされていない、情報の管理不備が多く、多くの問題点を持った資料の収集・管理が進められているのが現状である。

このため、県等で各市町村・施設が作ったデジタル資料を集め、デジタル・ミュージアムを構成しようとしても、現実には、メタデータの不備、映像・音声・文字データ等の統一性が無く、多くの課題が存在しているのが現状である。

これらの課題を解決するためには、ぜひ博物館等の専門化が、社会をリードすべきである。

これらのデジタル・スキルは、

「情報処理のスキル」「基本となる自然・文化の理解、各分野の専門性」「情報の管理に必要な著作権等の知的財産権、メタデータ」
の理解と実践力が必要とされている。とくに、カテゴリー化、シソーラスなどの共通化、知的財産権については、今後大きな課題である。

デジタル化のスキルとしては、これらの全体的な知識理解とその実践力が必要とされる。このため、岐阜女子大学では、文部科学省から現代 GP の選定を受けて、現在、全国の関係専門分野の方々の協力を得て、カリキュラムを開発している。

このような視点から見たとき、博物館等のデジタル化に必要なスキルは、次の図のように考える。（図 1 デジタル化のスキル）

図1 デジタル化のスキル

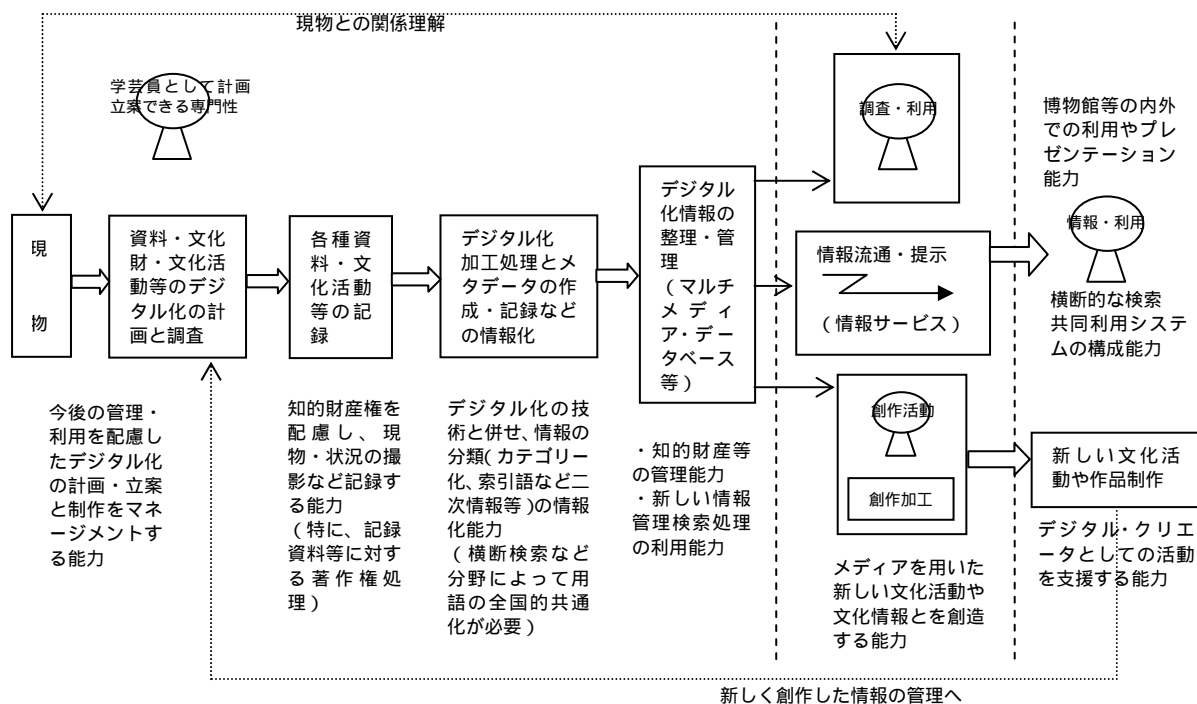
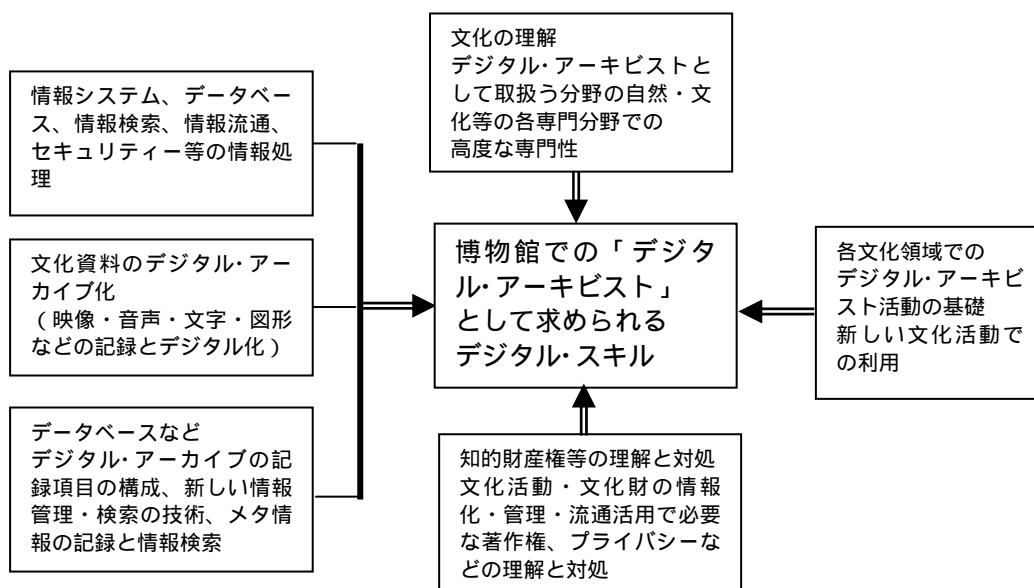


図2 博物館等で情報化に必要な能力



前頁の図に示すように、記録から管理・流通・活用までの、博物館等のデジタル化のスキルに必要な能力として、図 2(博物館での情報化に必要な能力)に示すように、情報処理の分野として、「情報システム関連の処理」、「映像・音声等の記録・デジタル化」、「データ管理項目・メタデータ」などのスキルが要求される。また、カテゴリー、シソーラスの作成には、各専門分野での情報内容(コンテンツ)についての知識と理解を持つ高度な専門性が要求され、学芸員としての能力が必要とされる。とくに、情報の共通利用のためには、カテゴリーや索引語等の他の館との整合性をもった取り扱いができるスキルが必要である。

作成された情報が有効に活用されるためには、知的財産権等の処理能力がされるべきであり、とくに、デジタル情報では、提供した情報の加工処理も可能になり、この点を配慮した著作権等の処理や利用者に対する指導・支援もできることが望まれる。

これらのデジタル・スキルの育成として、現在、デジタル・アーキビストの養成として、図 3 のような人材の育成が計画されている。

図 3 デジタル・スキルの能力をもつ人材の育成

